ドＳ婚約者

日向莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドＳ婚約者

【Ｎコード】
Ｎ０７４０Ｚ

【作者名】
日向莉子

【あらすじ】
「この俺に逆らうき？」　「このドＳ婚約者め…」
まだ若い美咲と同い年の誠二。お金持ちという肩書きのせいで無理矢理婚約者を決められてしまった。　だがそんな美咲も誠二に引かれていく。
恋愛を知らない美咲と、ドＳ婚約者誠二が愛し合う甘い甘いラブストーリー。

初面会

東野美咲、１５歳。

美咲の父は、大手有名会社の社長。

家はもちろん、別荘がいくつもあり、迷子になりそうなほど広い。

そんなまだまだ若い美咲だが、今日は、美咲の婚約者の所へ行くことになっていた。

「私、見知らぬ男なんかと結婚なんてしたくないわ！お父様、私は自分が結婚したいと思った男性と結婚します！」

東野家の使用人が運転する車の中で、美咲は父（聡一郎）に反抗していた。

「まあまあ、美咲落ち着きなさい。ただの婚約者というだけだ。それに彼はとても素敵な方だ。」

聡一郎はそういうと、ニコッと美咲に微笑んだ。

そんな聡一郎を前に美咲は不安でいっぱいだった。

一度も会ったことない、それに美咲はまだこんなに若い、なのにもう婚約者がいる。

「お母様～」

美咲は見方を作ろうと母（清子）にねだる。

「美咲ったら。会ってみて美咲が気に入らない相手ならまた、考えましょう。ね？」

美咲は、清子の言葉に納得し、頬を膨らませた。

「到着致しました」

東野家使用人にが、車の戸を開け、聡一郎、清子、美咲の順番で車から降りた。

美咲の前には、大きな屋敷。美咲の家より少し大きい。

「東野様ですね、お待ちしておりました」

すると相手の使用人らしき人が、美咲たちに屋敷を案内した。

「お父様…、迷子になりそうだわ…」

美咲は聡一郎の袖を掴み、相手の使用人に案内されるがまま屋敷の中に入っていった。

「旦那様、東野様がご到着されました」

「どうぞ」

部屋の中から鋭い声が聞こえる。

相手の使用人が部屋の戸を開けると、そこにはこの家の人たちがテーブルの椅子に腰を掛けていた。

「東野さん、お久しぶりです」

「久しぶりですね、藤倉さん」

聡一郎とこの家の持ち主（藤倉正人）は、前に会ったことがあるようだ。

美咲は正人の奥にいる男に見られていることに気づいた。

凄く怖いんですけど…

美咲たちは、正人たちと反対の椅子に腰を掛けた。

「こちらが私の娘の美咲です」

美咲は聡一郎と目が合い、あいさつしなさいと目で訴えているのがわかった。

「東野美咲です。初めまして」

「可愛らしい子ですね。誠二、お前もあいさつしなさい」

誠二…。彼は面倒くさそうに口を開いた。

「藤倉誠二です、初めまして」

顔もイケメンで、声も低音で見た目は完璧。

だが、見た目だけでは中身を見ることができない。

「そしたら、美咲と誠二君は別室で話してもらおう。私と藤倉さんでお話することがあるからな」

「え！ちょっとお父様！？私そんなこと一度も…」

すると聡一郎は、黙って行きなさいと言わんばかりの眼差しを美咲に向けた。

「誠二、案内してあげなさい」

正人がいうと誠二は無言で部屋を出ていった。

美咲はそれを追うように彼についていった。

彼は無言で別室に向かう。

美咲は彼の後ろ姿をただ見つめるだけだった。

するといきなり彼は立ち止まり、別室らしき部屋に入っていった。

変貌

美咲は誠二が入っていった部屋の戸をゆっくりと開けた。

美咲が見た光景は誠二がソファにドカッと座り、足を組んでリラックスをしている姿だった。

「お前もそこ座ったら？」

いきなり声をかけられ驚く美咲。

どこかムカつくこの男・・・。

「私はこっちに座ります。あなたの真正面などお断りです」

美咲は少し声に怒りを込め、誠二とは離れた場所の椅子に座った。

するといつの間にか誠二が美咲の真後ろに近寄ってきていた。

「うわっ！いきなり背後に来ないでよ！ていうか近寄らないで！」

美咲はすぐさま誠二から離れる。

「こんなイケメンがすぐ目の前にいるのに避けるとか、勿体無い奴」

やはり見た目だけでは判断できないものがある。

美咲の額には一粒の汗。

今まで近寄ってくる男は全て拒んできた。
美咲が唯一拒まなかったのは、父の聡一郎のみ。
「どこがイケメンなの？男なんてみんな気持ち悪いのよ！」
すると誠二は立ち止まって俯いた。
いいすぎたかしら・・・？
美咲は誠二の顔を覗き込むように近寄っていく。
「ご、ごめんなさい・・・。初対面の方に気持ち悪いなんていいすぎたわ」
彼はまだ俯いたままだ。　まさか、泣いているなんてこと・・・。
そこまで弱い男はいないと思っていたけれど・・・。
「だから、ごめんなさいって謝ってるじゃない・・・」
そして美咲が誠二に一メートル以内の区域に入った。
すると彼は美咲の腕を引っ張り、自分の方へ引き付けた。
な、な、なに！？
驚きを隠せない美咲は、呆然となっていたがすぐに我に返り抵抗をした。

「ちょっと離してよ！気持ち悪い！」

そういって美咲は誠二の胸を手で押し返した。

「へ～・・・、初めて見たこんな奴。俺に抵抗するんだ～」

な、なんなのこいつ・・・。き、気持ち悪い！

美咲はすぐさまこの部屋から出て行こうとしたが、鍵が掛かっている。

「え、なんで？開いてー！」

「魔法の扉じゃねんだから、言葉で言っても開かねえよ。バーカ」

「あ、あんた誰に向かってそんなこと言ってるのよ！こんな奴と婚約なんて絶対嫌！お父様！」

美咲の目には溢れるほどの涙が溜まっていた。

男なんて誰一人として信用できない（お父様意外）。

すると握っていたドアノブがガチャっと音を立てた。

「お、お父様・・・」

「どうしたんだい？誠二君すまなかったね、美咲が迷惑をかけてしまったようで」

「いえ、美咲さんはとても素敵な方です」

誠二の変わりように美咲は恐ろしさを覚えた。

その日は東野家に帰った。

帰りの車の中で美咲は誠二の変貌を聡一郎に訴え続けたが、まったく信じてもらえなかった。

高校生活

あれから一週間後。

美咲は大金持ちが通う、桜庭美学園に通うことになった。

「お父様、お母様、いってきます」

指定された制服を着て、学校へ向かおうとしていた。

「気をつけて行って来なさい。向こうには誠二君もいることだから、安心だ」

・・・誠二君？って、あの！？

美咲は車の中で頭をグルグル回転させていた。

確かに同い年ということもありながら、誠二も将来のために必ず学校へ行かなければならなかった。

「お嬢様、ご到着いたしました」

学校に着いたようだ。運転手が車の戸を開けた。

美咲は恐る恐る車を降りた。その後ろに一台のリムジンが止められている。

「いってらっしゃいませ、お嬢様」

そういって東野家使用人は車を走らせ行ってしまった。

美咲はどんな人が出てくるのだろうと拝見しようとしたが、車の戸を開けた瞬間、周りの女が大勢駆け寄ってきた。

「え、何これ？そんなに有名人なの？」

「有名人も何も、この車と言ったら藤倉家の御曹司、誠二様しかいませんわよ」

独り言で呟いたつもりが、隣の彼女には聞こえていたそうだ。

美咲はこの車に乗っている人物がようやく分かった。・・・藤倉誠二。

「ほら、あなたも見に行きますわよ！」

そういわれ、彼女に手を引っ張られ、大勢の女をかき分けながら一番前まで来てしまった。

美咲は呆然とし、前から来る誠二を見ていた。

何あれ、女ったらしだわ！私よりたくさん綺麗な女性はいっぱいいるのだから私じゃなくてもいいのよ！

すると誠二は美咲のいるところで足を止めた。

「嫉妬、してくれた？」

そう美咲に言い残し、彼はその場を断った。

な、な、な、何なのよ！

「やっぱり、かっこいいですわ！私、沢乃原由梨華と申します。あなたは？」

「東野・・・美咲」

そうして美咲の高校生活は始まりを迎えた。

由梨華は、どうして美咲に“嫉妬、してくれた？”などと言ったのかしつこく聞いてきた。

美咲は“あの人、私の婚約者なの”と言うと由梨華は大はしゃぎで“美咲といれば、誠二様の近くにいれるわ！”と言い続けた。

残念ながら、美咲は誠二との婚約は反対していて、美咲は誠二を避けている。

授業中、背後からの誠二の視線を感じていた。

・・・絶対見てる・・・

「ねえねえ、誠二様・・・美咲見てない？」

美咲は由梨華から話しかけられたが、無視して授業に集中した。

授業が終わったら、大勢の女子が誠二の周りを囲むため、美咲は救われていた。

そうしてそんな学校生活が続いていくと思っていた。

だが、そんな美咲の前にあの人が現れるとも知らず・・・

招待

高校生活始まり、あっという間に1ヶ月が過ぎていた。

この1ヶ月、普通の高校生と変わらない日々を送ってきた。

相変わらず誠二は美咲に視線を送り続けている。美咲はそれを跳ね返していた。

「東野美咲って子、このクラス？」

「え、あ、はい！私のことですか・・・ね」

美咲に話しかけてきたのは、他のクラスの男子生徒だった。

「職員室に来てって」

「あ、はい。由梨華、ちょっと行ってくるね」

そういって美咲はその男子生徒と職員室に向かった。

その光景をずっと誠二が見ていたことも知らず・・・。

「失礼します・・・」

「あ、東野さん。これ、教室まで持っていってくれないかな」

先生が言った“これ”とは、山済みにされている紙だった。

美咲はクラスの代表に選ばれていたからだ。付き添いの男子生徒も。山済みにされた紙を渡された美咲には、重すぎて耐えられなかった。

「おっと・・・俺、持つよ」

「あ、ありがと・・・」

名前も知らないこの男子生徒。とても優しそうで、誠二とは大違いだった。

教室に着き、教卓に紙を置くと「じゃ」といって立ち去ろうとした。

「あ、あの！名前・・・」

咄嗟に美咲は親切にしてくれたのに名前も知らず去られるのは嫌だと思い、名前を聞いた。

「斎藤隆介」

そういって斎藤はニコッと笑って行ってしまった。

ドキッ・・・え、何ドキって！

「意外とイケメンな人だね」

由梨華がそういいながら近づいてくる。私は由梨華のその言葉に同感した。

そうして美咲は斎藤と会話をする機会が増えた。もちろん誠二とは

全く口を聞いていない。

「今日、俺の屋敷に来ないか？」

斎藤がいきなり自分の屋敷に招待すると言い出した。

もちろん美咲は悩んだ。婚約者もいる（まあ、結婚する気はない）し・・・。

・・・少しならいいかな

「じゃあ、由梨華も連れてでいいかな？」

「俺も行く」

すると後ろから誠二が割り込んできた。

誠二の顔はとても怒りに満ちているようだ。美咲はその意味が分からなかった。

「いいぜ、今日学校終わったら俺の車について来て」

そういって美咲、由梨華、そして誠二で斎藤の家を訪れることになった。

美咲は誠二がいることがどうしても納得いかなかった。

「何あいつ、ストーカーなのかしら・・・」

「私は誠二様がいてくれて安心だと思うわよ。美咲、男は下心無い

方なんていないんだからね！」

由梨華が言っている意味がよくわからなかった美咲。

そうして斎藤の家に向かうのであった。

斎藤家

斎藤の家に着いた三人は車を降りると斎藤に案内され、周りを見渡していた。

誠二の家より小さく、迷子にはならなさそうだ。

「俺の家より断然小さいな」

誠二がそう呟いた言葉はみんなに聞こえていた。

やっぱり連れて来るんじゃなかったと後悔する美咲だった。

案内された部屋は斎藤の部屋でそこはシンプルで男らしい感じだった。

「うわ～、男の子の部屋初めて入った・・・」

美咲がそういうと誠二の眉がピクリと動いた。

「じゃあ俺、美咲の一番だ。ははは」

斎藤がそういうと誠二はムスッとした。“美咲”と名前を呼んでいたのもあるだろうけど。

そして斎藤の部屋で数時間お茶会っぽいことをした。

「私、お手洗い行きたいんだけど・・・」

「あ、案内するよ」

そういって美咲と斎藤は部屋から出て行った。

由梨華と誠二が二人残され、誠二はまだムスッとした顔をしていた。

「嫉妬しているのはどちらかしらね～、もしかしたらお手洗いじゃなくて別室行ってるかもよ？」

すると誠二は舌打ちをして、よけい眉間に皺を寄せた。

一方美咲たちは・・・

「俺ここで待っとくから」

美咲はちゃんとお手洗いに行っていた。だが、斎藤はこれをチャンスだと思っていたのだ。

美咲がお手洗いから出てくると斎藤は近くの部屋に美咲の腕を掴んで連れ込んだ。

「斎藤君？痛い・・・どうしたの？」

美咲が連れ込まれた部屋はお金持ちにしてはかなり狭い部屋だった。シングルベッドが一つ、そして物置のようになっている。

“下心無い方なんていないんだからね！”

美咲の脳裏に由梨華が言っていた言葉が浮かんだ。でも斎藤はそん

な人ではないと思っている美咲。

「俺・・・美咲のこと・・・」

そういいながら斎藤は美咲をベッドに押し倒す。そして斎藤は馬乗りをする。

「美咲のことが好きだ」

美咲の目にはたくさんの涙が溜まっていた。

「やめて・・・どけて・・・」

そういって無理矢理行為を求めてくる斎藤に反抗する美咲。

するといきなり部屋のドアが開いた。斎藤は手を止め、ドアの方を見る。

そこには、誠二がいた。誠二は美咲が押し倒され、泣いているのをみると斎藤を睨んだ。

「てめえ、何してんだよ」

「別に、藤倉君に関係なくない？」

斎藤が喧嘩を売るように言うと、誠二は斎藤の胸倉を掴んだ。

「こいつは俺の女だ。近寄るんじゃねえ」

そういい捨てた誠二は私の手を掴んで、部屋から出た。美咲はただ

ただ泣いた。

誠二は美咲を連れて斉藤の屋敷を出た。美咲はいつの間にか藤倉家のリムジンの中にいた。

もちろん到着地は藤倉家。さすがの美咲も躊躇い、無言で立ち尽くした。

「大丈夫、俺は俺を好きじゃない女に手を出したりしない」

そういうと誠二は足を進めていった。美咲は無意識に誠二の袖を掴んでいた。

「・・・・・もしもし、藤倉誠二です。今日はこちらで美咲さんを預からせてください・・・はい・・・失礼致します」

誠二は東野家に電話をかけ終わると美咲を自分の部屋にいれた。

「じゃあ、俺は行くから。しばらくしたら女使用人がくるから」

誠二が部屋を出て行こうとすると、無意識に美咲は誠二の服を引っ張っていた。

「一人にしないでよ・・・」

上目遣いで誠二を見る美咲は、誠二にとって理性を保つのが精一杯なくらい可愛かった。

弱み

やっと泣き止んだ美咲の目は赤く腫れていた。

部屋の中には誠二と美咲の二人。そんな沈黙の中を破ったのは誠二だった。

「沢乃原に言われたろ、下心無い奴はいないって。お前鈍感なんだから気をつけろよ」

「だって斎藤君は・・・優しかったから・・・」

切なそうに言う美咲の顔を見て、誠二はイラつきを抑えられなかった。

「お前はあいつにあんなことされてもあいつを庇うのかよ・・・俺、助けた意味ねえじゃん」

そういって誠二は美咲のそばから離れていく。その時の彼の顔はとても怒っていてどこか切なそうだった。

庇っているわけじゃない・・・。でも、本当に優しい人なんだもん・・・。助けてくれたことだって本当は・・・。

「助けてくれたことは感謝してるもん・・・、ちょっとドキッとした・・・でも婚約はしたくない」

最後のよけいな一言で誠二の機嫌がまた悪くなった。

「そんなこと言っていいのか？俺はお前の恩人だぞ？俺が助けに行ってなかったらお前は今頃あーんなことやこーんなことされてるかもな～」

なんなの、こいつ！ムカつく！

美咲はだんだん誠二にムカついてきた。

「お前の両親に言ってやろうか？」

その言葉に美咲は驚き、咄嗟に素直になる。

「本当に感謝してます！ありがとうございました！結婚でもなんでもするから今回のことは誰にも言わないで！お父様には迷惑かけたくないの」

上目遣いで訴えてくる美咲に誠二は断れなかった。すると誠二の頭に何かが浮かんだようだ。

「なんでもするって言ったよな？だったら明日、俺とデートして」

「・・・は？」

美咲の頭の上には、ハテナマークが並んだ。

今この人、何て言った？　俺とデートしてって言った？

「嫌です」

「そんなこと言っていいの？」

弱みを握られている美咲は誠二に反対することなど出来なかった。

「もう！わかったわよ！すればいいんでしょ！」

そういうと誠二はニヤッと微笑んで「それと・・・」と付け足しをしてきた。

「俺のことは誠二って呼ぶこと」

誠二はそういい残すとお風呂へ行ってしまった。

「もう！何なのよ！」

美咲は反抗できない誠二にムカついていた。そしていつの間にか美咲はベッドに横になり眠ってしまっていた。

「おい、上がったからお前も・・・」

誠二がお風呂から上がった時には美咲は既に眠っていた。

誠二は美咲が寝ているベッドに座り、美咲の寝顔を見つめていた。

「・・・この顔、反則だろ」

そうして誠二もいつの間にか美咲と同じベッドに横になり、眠ってしまっていた。

誠二

目が覚めると美咲の目の前には誠二の寝顔が合った。

「きゃあああああああああああ！」

美咲は誠二を押し離し、ベッドから離れた。

「いてぇな・・・」

「な、な、な、なな何であんたが私と同じベッドに寝てんのよ！信じられない！それにどうして上半身裸なのよ！」

そういいながら美咲は誠二に背中を向けた。

「もう、家に帰る！電話借りるわよ！」

近くにあった電話を借りて、東野家の車を呼んだ。

そして勢いよく部屋を出て行ったかと思うとゆっくりとドアを開けて

「・・・玄関まで案内してください」

恥ずかしながら言う美咲の顔に誠二は頬を染めフッと笑い、美咲の頭をポンッと叩いて「ついて来い」と言った。

お金持ちの美咲だと言っても藤倉家に慣れない者は必ず迷子になるであろう。

誠二に案内されるがまま、玄関に到着した。既に東野家のリムジンが到着していた。

「1時に迎えに行くから」

「・・・え？」

1時？迎え？

美咲は昨日のことを思い出した。“俺とデートして”という言葉を。

只今の時刻、10時。

「は、早く！急いで！」

女の子はおめかしをしていくのが当然。でも相手は美咲が嫌いな誠二。なのにも関わらず美咲は無意識に誠二とのデートを楽しみにしていた。

東野家では、聡一郎は仕事で家におらず、清子は同窓会へ行くと言っていない。いるのは数名の使用人たちのみだった。

「お嬢様、昼食の準備ができました」

「わかったわ、すぐに向かいます」

そういいながら美咲は着ていく服を選んでいた。

いつの間にか刻々と時間は過ぎていき、あっという間に1時になっていた。窓から外を見ると藤倉家のリムジンが止まっているのが見

えた。

美咲は小走りで誠二に近づいていった。

「・・・思いっきり気合入れたな」

「あ、いや・・・似合ってないかしら？」

美咲がそういうと誠二は黙って美咲に背中を向け、ボソッと「すげー可愛い」と呟いた。

「え？何？聞こえない」

「別に何も言ってねーよ、いいから早く乗れ」

誤魔化す誠二の頬は少しピンク色に染まっていた。

行く途中の車の中は心臓の音が聞こえそうなくらいの静けさだった。

「到着いたしました」

藤倉家使用人が車の戸を開けると動物園に到着していた。

「動物園なんて何年ぶりかしら」

そういって美咲は子供がはしゃぐような足取りで動物園の中に入っていった。一方誠二はよかったと一安心して、クールに美咲の後を追った。

「ねえ、見て！象だよ！やっぱり大きいわね～。あ、あっちにゴリ

ラいるんだって！行こう！」

次々と突っ走っていく美咲。誠二はというとなかなか自分の名前を呼ばない美咲にイライラとしていた。

「ゴリラだ～、あなたそっくりよ！」

美咲は誠二の顔を指差し、お腹を抱えて笑った。誠二は美咲の指差す手を掴んだ。

「美咲」

いきなり初めて名前を呼ばれ、美咲は驚き笑いが引いた。

「美咲、俺の名前呼べよ。あなたとか俺だってちゃんと名前があるんだよ」

そういう誠二の顔はとても真剣だった。

そんな誠二に美咲は申し訳無さそうな顔をした。するといきなり誠二は美咲に背を向け、歩き出してしまった。

「ちょっと待ってよ！ごめんなさいってば！」

聞く耳を持たない誠二。美咲は少し顔を赤くしながら言った。

「誠二！・・・待って」

すると誠二は立ち止まり、美咲は誠二に駆け寄っていった。

「ごめんね・・・誠二・・・」

そういうと誠二は肩を震わせながら押さえ笑いをした。

ゴリラと猿

誠二が肩を震わせながら笑っているのを見て美咲は苛立ちが込み上げた。

「引っ掛けたのね！なんて悪人なの！」

美咲は顔を真っ赤にして、頬を膨らませた。

「引っ掛かる美咲が悪い。あー、笑いすぎてお腹痛い」

ムカつくー！何この男！

「美咲って意外と単純？ていうか、バカってやつ？」

誠二がそういうとまた笑い出した。美咲はもっともっと怒りが込み上げる。

「最低！最悪！バカ！アホ！・・・ゴリラ！」

美咲もさすがに最後の“ゴリラ”には、躊躇いを持ったが口が滑ってしまった。

「俺がゴリラだったら、美咲は猿だな」

「な、なんですって！？この私を猿呼ばわりするなんて！なんて失礼な！」

「じゃあ、美咲だって俺をゴリラ呼ばわりして失礼じゃないとでも？」

すると美咲は何も言い返せなくなり、怒りだけが込み上げるだけだった。

相変わらず誠二はお腹を抱えて笑っている。

「ねぇねぇ、あそこのカップルとても美男美女じゃない？」

「ホントだ～。男の子の方、すっごいカッコイイね！どこかのモデルかな？」

どこからか聞こえてくるその声に美咲は一人ぼっちになった気分だった。

どうしてあいつが褒められてるのよ！

美咲の頭の中のどこかで嫉妬があったのだろう。怒りより哀しみが増えていく。

「美咲、妬いてる？」

「ち、違うわよ！」

図星だった美咲は顔を真っ赤にしながら否定する。

「笑い死にしそう・・・、美咲見に行くか」

そういって誠二は美咲の手を取り、歩き出した。

行き先はもちろん、猿。

「美咲がいっぱいいるぜ」

すると誠二は美咲に満面の笑みを見せた。美咲はその笑顔を見て、少し顔を赤らめた。

どうしてこんな奴のこと・・・意識してるの・・・？手を握られても悪い気しないし、笑顔見せられてドキドキして、これだったら普通の女の子だわ・・・。

そうしていつの間にか閉園になるまで、動物たちを見回っていた。

「そろそろか・・・」

もう少しでこの楽しい時間が終わってしまうと思った美咲の顔は、とても寂しそうだった。

その顔を見た誠二は美咲の頭をポンッと叩いた。

美咲は叩かれたところを両手で押さえ、誠二を見た。

「そんなに俺が恋しい？」

その言い方は美咲にとって頭に来るものだった。

「別に恋しいなんて思ってないわよ！早く帰るわよ！」

またも図星を言われる美咲。そんな美咲は照れ隠しとしてさっさと動物園から出て行った。

そんな美咲を見て誠二は「バーカ」と小さな笑いを見せた。
動物園の前には藤倉家のリムジンが止まっていた。
美咲、誠二の順に乗って藤倉家使用人は車を走らせた。
「ねえ、どうしてあの時・・・助けに来てくれたの？」
ポツンと呟いた美咲の言葉は誠二の耳に届いていた。
「あ、えっと、さっきのは気にしないで・・・」
「沢乃原に美咲が襲われてるかもよ～とか言われて、それで帰ってくるの遅かったからトイレ見に行ってもいねーし、そしたら近くの部屋から物音が聞こえて・・・そしたらあいつが美咲を・・・。あのさ、本当に何もされてないんだよな？」
「うん・・・」
まさかここまで考えてくれていたなんて・・・。
美咲は誠二の優しい心にだんだん引かれていっていた。
そして東野家に着き、美咲は車から降りると、誠二は行ってしまった。
その夜、美咲の頭は誠二でいっぱいになっていた。

好きと嫉妬

誠二とのデートの翌日。

美咲は上気分で学校へ向かった。

「美咲！」

後ろから呼ばれ、振り返ると由梨華の怖い顔が飛んできた。

「あなた、あの後連絡もなしに先に帰ったでしょ！しかも誠二様と一緒に！私、置き去りにされたのよ！？誠二様は部屋から出て行っちゃうし、帰ってきたのは斎藤で、さっさと帰ってくれる？って言われたのよ！？どういうことよ！」

怒りが止まらない由梨華に「まあまあ」と言うと「お昼にしっかり聞かせてもらうわよ」と言われ、根掘り葉掘り聞き出され、昨日デートをしていたことも言わされた。

由梨華の怒りは放課後になっても治まることはなかった。

そして放課後。美咲が教室を出ようとしたときだった。戸の前には斎藤が立っていた。

美咲は戸惑いながら、逆の戸から出ようとする。

「美咲！話があるんだ・・・、少しでいい、俺に時間をくれないか」

斎藤の目は、とても真剣なものだった。

美咲もあの事と向き合わなければならないとは思っていた。
そして美咲と斎藤は、二人きりの教室の中で話し合った。
するといきなり斎藤が美咲に頭を下げ、
「本当にすまなかった！いきなりあんなことして、ただで許されるなんて思っていない」
何度も何度も謝罪してくる斎藤。
「いえ、もういいの。もう二度とこんなことしないと誓ってくれるなら・・・」
「誓う！もう、もう二度とこんなことしない！本当にすまない！」
何度も、何度も頭を下げ、謝ってきた。でも「好きだったのは本当だから」そういってくる彼は嘘をついているとは思えなかった。
「ごめんなさい・・・、私・・・」
美咲が言いかけるとその先の言葉がわかっていたかのように斎藤は美咲の言葉を遮った。
「わかってる・・・、藤倉君が、好きなんだろ？」
自分でも認めたくないと思っている美咲だが、あのデートの夜、誠二から頭が離れなかった。

それは、きっと、好きだから・・・。

「ごめんなさい、でも嬉しかったわ。ありがとう、じゃあ、私行くね」

「おう！こっちこそありがとう！」

そういって問題は解決した。

美咲は教室を後にし、靴箱へ行くと誠二が立っていた。

「え・・・、どうして？帰ったんじゃなかったの？」

すると誠二は美咲の顔をみて深刻な顔で言った。

「・・・お前さ、少しくらい警戒しろよ！どうして襲われた奴なんかと気軽に話してんだよ！ホント・・・ほっとけねえ」

心配、してくれてたのかしら？

美咲は突然、クスッと笑い頬を少し赤く染めた。

「何笑ってんだよ、こっちは真剣なんだぞ！」

そういう彼の顔は本当に真剣だった。でも美咲はクスクスと笑いを止めない。

「私が男と話してたら、誠二は嫉妬しちゃうの？」

すると誠二は図星を言われ顔を少し赤くした。

「嫉妬してるのは誠二の方だわ。いつも私に妬いてるの？とか嫉妬してるの？とか言ってくるくせに、本当は誠二が一番・・・」

美咲の言葉は誠二の唇によって遮られた。

「ちょっと！何よ、いきなり！」

誠二の唇が離れた時、誠二の顔は真っ赤になっていた。

いつもクールに振舞っている誠二は、今回だけとても子供のようだった。

そんな顔されたら、恋しくなるじゃない・・・

そうして美咲は誠二から逃げるかのように東野家の車に乗り込んだ。

嫌いになんて・・・

キスされてから美咲と誠二が会話をすることはなくなった。

そして、ついに夏休みを迎えようとしていた。

「とうとう夏休みですわー！」

私の隣で由梨華がそう言った。

あのキスから誠二と会話していないことを美咲は気にしていた。そして誠二も・・・。

そんな二人の様子に気付いていた由梨華は仲直り計画を立てていた。

「ねえねえ、夏休み、旅行にでも行かない？私と私の彼氏と美咲と・・・誠二様で！」

「いきなりだね、っていうか由梨華、彼氏いたの？」

「ええ、もちろんですわ！私の婚約者なのよ」

そうだわ。由梨華にだって婚約者はいるわよね。

「で、旅行！行こうね！」

そうして由梨華に無理矢理誘われた旅行。もちろんお金持ちの美咲たちには何の苦でもなかった。

だが、美咲にとってキスされてから誠二と話していない。そのことで美咲は苦を感じた。

「美咲、誠二様を誘っておいてよ！」

「え！？無理だよ！」

「えーと、旅行はどこにしようかな・・・やっぱり海よね！ハワイとか？あ、でも私英語・・・」

そういってどんどん決めていく由梨華。美咲の意見は完全無視だった。

由梨華が勝手に決めていって、結局、沖縄になってしまった。

もちろんお金持ちの美咲は日本の都道府県を全て周っていた。

そしていつの間にか、放課後になっていた。

これで家に帰れば、夏休み突入だ。その前に誠二に旅行の誘いをしなければいけない美咲。

「引き止めてあげといたから、ちゃんと誘っておいてよね！」

由梨華はそういい残し、逃げるように教室を出て行った。

いつの間にか教室の中は、美咲と誠二のみになっていた。

美咲の心臓は爆発しそうなくらいドキドキしていた。そして

「あ、あの！夏休み、一緒に旅行行こう！」

勇気を振り絞って旅行に誘った美咲。すると誠二がいきなり笑い出した。

「な、なんで笑うのよ！こっちは勇気振り絞って言ったのよ！」

「・・・嫌われたかと思ってたから」

そう言った時の彼の顔はとても悲しそうで喜んでいるようだった。矛盾している顔だ・・・。

「別に・・・嫌いになんてならないわよ・・・」

「え、だったら好きってこと？」

「どうしてそうなるのよ！」

すると誠二は後ろから美咲を抱きしめた。その時の彼はとても優しくて温かかった。

「抵抗しないの？」

その言葉に美咲は急にカチンと来た。

「ホントどうしてそんなムカつく言葉ばかり言うのよ！」

「美咲が俺をなかなか好きになってくれないから」

どうしてそんな甘い言葉ばかり言うのだろう。美咲は我慢できず、

彼を突き放し少し距離をとり

「好きよ！大好き！嫌いになんて・・・嫌いになんてならないわよ！」

そういうと顔を真っ赤にしながら美咲は逃げるように教室を後にした。

誠二は驚きと喜びで胸がいっぱいだった。

「ホント・・・美咲には敵わねえ・・・」

プラン無し旅行

旅行当日。7泊8日の旅行。時刻、朝の１０時。

美咲と誠二、由梨華、由梨華の婚約者（寿　拓海）は誠二の自家用ジェット機に乗り込み、沖縄へと出発した。

高校生になって初めての旅行。美咲は誠二に告白したことを思い出すたびに顔を真っ赤にした。

沖縄の到着地は誠二の別荘。時刻、昼の１２時。

「うわ～、誠二様の別荘大きい！」

「ってかなんで俺のジェット機に俺の別荘で泊まりなんだよ！」

子供のようにふて腐る誠二。

「まあまあ。さて、さっそく中身拝見しに行きましょ！ね、拓海さん？」

「おう！」

そう言って二人は遠慮無しに別荘へ入っていった。

「俺たちも行くぞ」

美咲は誠二の言葉に肩を震わせた。あの告白から誠二のことを意識

しすぎてしまっているのだ。

そうして美咲と誠二も別荘の中に入っていった。

由梨華は自分勝手に「この部屋、私たちが使わせてもらうわね」といって、由梨華と寿は同じ部屋に入っていった。

由梨華と寿さんは同じ部屋か～・・・。

そう思った美咲は、後ろから感じる誠二の視線に緊張していた。

「じゃあ、俺はあっちの部屋使うから」

「え・・・うん・・・」

期待していた言葉と違うことを言われ、美咲はシュンとなった。そして誠二と逆の方向にトボトボと歩いていた。

「美咲」

すると誠二に呼び止められ、誠二の方へ振り返った。

「俺と一緒の部屋がよかった？」

そういうと誠二はニヤッと笑った。図星を言われた美咲は顔を真っ赤にしながらフンッと言ってもとに振り返り歩き出した。

美咲はそこらへんの適当な部屋に入り、荷物を置いてダブルベッドに転がり込んだ。

その途端、どこからか由梨華の声が聞こえてきた。

『みなさーん、聞こえてますかー？これからご飯食べに行こうと思うので玄関に集まってください！』

どこから通じているのだろうかと思いながら、美咲は部屋を後にした。

既に3人とも集まっていて、庶民的な沖縄そばを食べることになった。

「ぷは～、ご馳走様でした！」

満足したような由梨華の顔は、とても幸せそうだった。

誠二は庶民的な料理を食べたことがないのか、躊躇いながら口に運んでいた。

「よーし！明日は海ですわー！」

そういってプランをどんどん立てていく由梨華。

美咲は苦笑いをしながら沖縄そばを食べ終わった。

時刻、午後3時。

今日はもう疲れているということで部屋で休むことになった。

夕飯はなぜかバラバラで食べることになってしまった。

「初日からこんなので大丈夫かな・・・」

そう心配しながら美咲はベッドに寝転がった。そしていつの間にか眠りについていた。

焼きそばパンはキス

いい匂いが部屋の中を包み、美咲は目を覚ました。

するとテーブルの椅子に座っている誠二の姿が目に入り、美咲は勢い良く体を起こした。

「なんであんたがいるのよ！部屋に入るときくらいノックしなさいよ！」

「は？したけど、返事ねえから入ってみたら、お前が爆睡してたんだろ？」

そ、そうか・・・。

誠二の言葉に一度は納得したものの、結局美咲は誠二に反抗するのだった。

「返事ないなら入らないでよ！お留守かもしれないでしょ！」

「別にいいだろ？俺のこと好きなくせに」

その言葉に美咲は顔を真っ赤にして、夏休み前日の放課後を思い出していた。言い訳することが出来ない美咲。

「だ、だったら誠二だって私のこと好きなら、好きな人の気持ちくらいわかってよね！」

そういうと誠二はいきなり立ち上がり、美咲の方へ近寄ってきた。

「じゃあ、美咲だって俺の気持ちわかって」

「はあ？あんたの気持ちなんてわかんないわよ！」

「俺が思ってることは・・・」

すると誠二は美咲の近くまで行き、美咲の耳元で囁いた。

「美咲の全部、俺に欲しい・・・」

美咲は目を丸くし、顔を林檎のように真っ赤にした。

そんな美咲を嘲笑うかのように誠二は微笑んだ。

美咲は頬を風船のように膨らませ、そっぽをむいた。

「全部って何よ、意味分かんない」

そういうと誠二は美咲を押し倒し、唇と唇が重なる寸前で止めた。

「こういうこと」

美咲はまたもや真っ赤になり、熱を帯びていた。

誠二は美咲から離れ、笑いを堪えていた。

「ホント、ムカつく！ムカつくムカつく！」

そういってまたそっぽをむく美咲。その瞬間、美咲のお腹が鳴った。
その音は誠二に聞こえていたらしく、誠二は笑いを堪えていた。
「これ、食べるか？」
誠二が持っていたものは焼きそばパンだった。どこかのコンビニで買ってきたのだろう。
「いる！」
そういって美咲が焼きそばパンに手を伸ばした瞬間に誠二は焼きそばパンを上に引き上げた。
「俺に愛を捧げてくれたらあげる」
誠二の言動に美咲は怒りを感じていた。
「何よ、くれたっていいじゃない！っていうか愛を捧げるなんてどうしろっていうのよ」
「キス・・・してくれたらあげる」
「はあ！？そんなの無理に決まってるでしょ！どうして私があんたなんかに！」
「じゃあ、あげない」
誠二は焼きそばパンを握り締め、部屋を出て行こうとした。

「あー！もう！分かったわよ！すればいいんでしょ！」

美咲のお腹は限界を達していた。さすがに何も食べず、一晩を越すのは無理だと思った美咲なのだった。

そして誠二は美咲の方に振り返り、目を閉じてしゃがみ込んだ。

「あ、ほっぺとかダメだから」

「わ、わかってるわよ」

美咲は顔を真っ赤にしながら、誠二の唇に自分の唇を持っていき、軽くキスをした。

美咲は直ぐに唇を離し、誠二の手に握られていた焼きそばパンを奪い、テーブルの椅子に座って焼きそばパンを食べ始めた。

そして誠二は黙って部屋を出て行ってしまった。

別行動

翌日、海へ行くことになった美咲たちはジェット機を運転していた使用人に頼んで車を出してもらった。もちろんリムジン。

「海、楽しみですわね！・・・それにしても、昨日からあなたたち仲悪いわよね」

由梨華が見ていた先は、美咲と誠二だった。

仲が悪いというより、気まずいと言った方が正確なのだが・・・。

「別に仲悪いわけじゃねえよ。美咲が俺と会話したら直ぐ顔真っ赤にするから話しないだけ」

サラッと言った誠二の言葉にどこか突っ込みたいのだが、サラッと言われてしまい少しの沈黙が流れた。

「だったら二人はラブラブということでよろしいのよね？」

「おう」

どんどん進んでいく話。その話に美咲は乗れていなかった。寿は苦笑いをしながら会話に参加。

そんなことをしているうちにエメラルドビーチへと到着した。

美咲たちは車から降りると、由梨華が浜辺へ走っていった。

「きれー！」

確かにエメラルドビーチといわれるだけ、とても綺麗だった。

そして美咲と由梨華は水着に着替えるために更衣室へと入っていった。

「今日は貸切だから、ゆっくり出来ますわね」

「うん、ねえねえ、これ・・・本当に似合ってる？」

美咲は至急で水着を取り寄せるため、由梨華にどれにしようか選んでもらっていた。

「すっごい似合ってるわよ！可愛いわ！」

真っ白のフリルが着いているビキニ。首後ろと背筋に結ぶパターンのビキニ。白色ということもありながら透けてしまいそうだった。

「上に羽織って出よう・・・」

美咲は上に羽織物を掛け、誠二たちのところへ向かった。

「拓海さーん！これどうかしら？似合ってる？」

「おう、すげえ似合ってる！由梨華は何着ても似合ってるから」

「やだ、もう！」

バカップルのようだ。

一方、美咲と誠二はというと・・・。沈黙のままだ。

誠二はサングラスをかけて体を焼いているのか知らないが仰向けになって寝ている。

美咲は日が当たらないようにテントの中で体育座りをしていた。

「・・・ラブラブだな～」

美咲がポツンと呟いた言葉は誠二の耳に届いていた。

そして海を満喫した後は、お金持ちでも我慢できる食店へと入っていった。

「ねえねえ、明日から別行動しない？」

「・・・え？」

由梨華が発した一言に美咲は耳を疑った。

「私と拓海さん、美咲と誠二様で別々でデートとか・・・ね！」

そういって由梨華は美咲のことは気にせず、拓海とラブラブしていた。

そしてなぜか由梨華が決定権を持っているわけでもないのに、別行動となってしまった。

翌日。眩しい光が美咲の部屋に差し込み、目が覚めた。
美咲は携帯を手にし、時刻を見ると朝の１０時だった。
「うわ！もうこんな時間・・・っていっても・・・」
今日から別行動をすることになっていた。
きっと由梨華と寿は出かけていることだろう。
すると戸をノックする音が聞こえた。
「ね、寝たふり！」
そういって美咲はまたベッドに横になり、寝たふりをした。
もちろんノックし、侵入してきたのは誠二だった。

あっという間

「また爆睡かよ・・・」

寝たふり、寝たふり。

誠二は美咲の寝ているベッドに座り込んだ。

すると美咲の頭を撫で始めた。

え!?何事!?

「・・・美咲、起きてるんだったら抵抗しろよ。おもしろくない」

そういうと誠二は美咲の額にデコピンをした。

「いた!」

「やっぱ、起きてた。わかりやすいやつだな」

そういって誠二は美咲にニヤッと笑ってきた。

「ムカつくー!」

「あ、そういえば、あいつらもうデートに行っちまったみたいだな」

あいつらとは、由梨華と寿のことだろう。もちろん今頃ラブラブしているであろう。

「俺らもどこか行くか？」

誠二の意外な言葉に美咲は呆然とした。

「そんな間抜けた顔するな、行くのか、行かないのか」

「い、行く！」

「だったら早く行く準備しろ」

そういわれ、美咲はベッドから降り、準備を始めた。

誠二も自分の部屋に戻り、支度をした。

美咲と誠二は使用人を使って、車で水族館へ行くことにした。

もちろんいきなりの貸切は無理だったので、大勢人がいる中、美咲と誠二は水族館へと足を進めた。

「誠二！見て！鮫！」

子供のようにはしゃぐ美咲は、あの動物園のときと変わっていない。

水族館の中は、真っ青で海底にいるかのように触れ合っている気分になった。

「本当に素敵だわ・・・」

そうしてあっという間に時間が来る。
楽しい時間はあっという間に終わってしまう。

そしていつの間にか８日目。
みんなでジェット機に乗り込み、別行動をして何をしていたか言い合いをした。
東野家に帰ったのは夕方の４時だった。
「おかえりなさい、美咲」
「ただいま、お母様」
家には清子がいて、聡一郎は仕事で忙しく何日も帰ってきていなかったらしい。
そして聡一郎が帰ることはだんだん少なくなっていっていた。
美咲の夏休み生活も後少しで終わりを迎えていた。
あの旅行から誠二や由梨華と連絡をとることはなく、みんな忙しくしていた。
美咲は退屈な日々を過ごしていた。
「つまらないわ・・・」

そうしていつの間にか夏休みが終わり、聡一郎が家に帰ってくることはなかった。

婚約者

夏休み明けの学校が始まった。

「みーさーきー」

後ろから美咲を追いかけてきたのは由梨華だった。

「おはよう」

夏休み前と変わらない学校生活。

そんな時、ある噂が美咲の耳に入った。

「ねえねえ、誠二様って東野さんの婚約者なのよね？私見ちゃったんだけど・・・」

風が木々を揺らし、大事なところが聞こえなかった。

そしてその噂は美咲の知らないところで広がっていくのだった。

「美咲！」

「あ、由梨華。どうしたの？」

由梨華は息を荒げ、美咲の方へ走ってきた。

「あのね・・・、誠二様・・・他の婚約者がいるって・・・噂が・・・」

他の・・・婚約者？私以外の？

「それで、昨日・・・高級ホテルに入っていったって・・・・」

美咲は頭が混乱し、立ちくらみがした。

壁に寄りかかり、美咲は頭を抱える。

「何かの、間違いよ・・・・」

「でも、ホテルなんかに入っていくかしら？それって美咲より進んでるってことでしょ？」

他の婚約者なんて聞いたことない。お父様も帰って来ないし、どうなってるの？

美咲は現状を理解するのが精一杯だった。

授業で先生が言っている言葉は耳に入ってこない、周りのざわめきも聞こえないくらい。

私・・・、こんなにも誠二のこと思っていたなんて・・・・。

「由梨華！私、誠二に直接聞いてみるわ！」

そして美咲は誠二のもとへ直行した。

「え・・・今から？」

美咲は誠二がいつも行くと言っていた屋上へと足を進めた。
すると屋上の戸が少し開いていた。
「おい、やめろよ！」
誠二の声だった。美咲は戸の隙間から顔を覗かせた。
「やめろ！綾！」
「いやよ！誠二君は私と婚約してくれるって言ったじゃない！」
・・・女の人の声？婚約？
いきなり誠二と知らない女の人が現れ、その女が誠二に馬乗りをしていた。
すると女は誠二に無理矢理キスをした。でも次第に誠二も目を瞑っていた。
「え・・・」
いつの間にか美咲は屋上から離れようと走っていた。
何も聞かなかったことにして、何も見なかったことにして、何の感情ももたなかったとして・・・。
美咲の頬にいっぱいの涙が零れた。
「どうして・・・？いつの間にか、誠二のこと、こんなにも好きに

なっていたなんて・・・」

美咲は一人、廊下で泣き崩れていた。

近づく誕生日

あれから美咲は誠二をまた避けるようになった。

昔、高校生活始まりのときと同じように・・・。

「由梨華、私・・・やっぱり婚約解消してもらうわ」

「え！？いきなりどうして？」

「いきなりじゃないの・・・、前から考えてた。それ以前に私と誠二は不釣合いだったのよ」

美咲の顔は哀しみと寂しさで溢れていた。

そんな美咲を見て、由梨華は大きな溜息をついた。

「誠二様が美咲を裏切った証拠でもあるの？そんな曖昧な情報で婚約を解消しようなんて、最初から愛がなかったのよ！言葉だけの愛だったってことだわ！」

「え、ちょっと、由梨華？」

いきなり声を上げた由梨華に美咲はポカンと間抜けた顔をした。

「そうよ！美咲は誠二様を愛してはいなかった！そして誠二様は東野家を乗っ取ろうとしてたんだわ！」

「それは違う！」

美咲は由梨華が言った言葉に批判した。

誠二が美咲をどう思っているかはわからないが、美咲は確かに誠二を愛していた。

それを、証明したかったのだ。

「私は、愛してたわ！だけど、誠二の気持ちはわからない。言葉だけの愛だったのかもしれない。でも私は、そんな誠二でも、どんな誠二でも愛したいと思ったわよ！」

感情が膨らむほど、人は相手を求め、強くなる。

でも、それが割れてしまったら、憎み、苦しみを露にし、弱くなる。

「美咲がどれだけ誠二様を思っていたかは分かったけど、誠二様は・・・」

そうだ。誠二は美咲のことをどう思っているかわからない。

あの時のキスも、どうして目を瞑って、キスを拒否しなかったのかも・・・。

そして近づくのは、１６歳になる美咲の誕生日だった。

美咲と由梨華はいつも通り学校を帰るときだった。

「・・・そういえば、美咲って誕生日いつ？」

「明後日」

「・・・えええぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

由梨華の突然の驚きに、美咲まで驚かされた。

「知り合いを招待して誕生日パーティーを開く予定なの。由梨華のところも招待したはずだけど・・・」

「・・・最近、彼の家に泊まりだったから」

由梨華が知らない理由がわかった。

でも誠二のところにも招待状が届いているはずだから、きっと彼も来るのだろう・・・。

婚約者ということもあるのだから・・・。

「明後日・・・１０月２５日ね・・・」

すっかり木々は紅葉を感じさせていた。少し肌寒くなり、カーディガンを上に羽織る時期になっている。

「私、そこで婚約解消のこと・・・言おうと思ってるの」

「・・・そう。私、もういいわ！美咲の好きなようにすればいい！私は、何があっても美咲の見方だからね！」

そういって由梨華は美咲を優しく抱き寄せた。

温かくて、優しさを感じられる・・・。

美咲の頬に一粒の涙が零れた。

婚約解消？

１０月２５日、美咲の誕生日がやってきた。

東野家の庭で開くことになっている誕生日パーティー。

使用人が庭で大勢働いている。掃除に机椅子の運搬。中ではシェフが料理を作っている。

一方、美咲は清子と一緒にリビングで寛いでいた。

「お母様・・・、お父様、帰ってくるかしら」

連絡は少しずつあったものの、あの夏休みから一度も家に帰ってきていなかった。

聡一郎は『美咲の誕生日パーティーには絶対戻る』と言ったきり、連絡が取れていない。

美咲も会社でいろいろ大変なのはわかっていた。

「大丈夫よ、聡一郎さんは戻ってくるわ」

そういって清子は美咲を優しく抱き寄せた。

そんな清子も胸騒ぎがしていたのは確かだった。

すると戸を叩く音が部屋に響いた。

「どうぞ」

「旦那様がお戻りになられました」

使用人が言ったその言葉に美咲と清子は驚き、急いで玄関へと向かった。

多くの使用人が玄関から道を作っていた。

「お父様！」

「ただいま」

美咲は目に涙をいっぱい溜め、聡一郎に抱き付いた。

聡一郎は美咲の頭を優しく撫でると、清子の心配そうな顔を見て微笑んだ。

そして時間はあっという間にすぎ、美咲の誕生日パーティーが開かれた。

招待人数は約１００人。

聡一郎がマイクを持ってみんなの前に立った。

「今日は娘のために集まっていただきありがとうございます」

そして聡一郎は美咲にマイクを渡した。

美咲は、この時決意した。婚約の解消を宣言すると・・・。

「今日は皆様、お集まりいただきありがとうございます。この場を借りて・・・」

美咲は少し言うのを躊躇ってしまった。

なぜなら目の前に誠二がいたからだ。でもその後ろには「覚悟を決めて」と眼差しを向けてくる由梨華の姿があった。

「この場を借りて、私は・・・、私は藤倉家との婚約を解消させていただきたいと思っています」

数秒の沈黙だった。直ぐに周りはざわつき始めた。

美咲は、目の前にいる誠二がどんな顔をしているのか見たくても見れなかった。

「美咲！何を言っているの！」

横から清子が止めに入ろうとしたが、聡一郎が清子を止めた。

「私は、誠二さんとは結婚致しません」

美咲の目は真剣だった。

一点を見つめ、決意した。

すると聡一郎が美咲から、ゆっくりマイクを貰うと

「娘は今日、１６歳になりました。法律上、女性は１６歳から結婚を許されています。私もこの場を借りて、皆様に言っておきたいことが御座います」

言っておきたいこと・・・？

美咲は何を言うつもりなのか検討もつかなかった。

「私、ニューヨークへ行きます。その前に娘に婚約をしてもらいたい方がいらっしゃいます」

・・・え？ニューヨーク？婚約してもらいたい方？

美咲はチンプンカンプンになった。

こんな話、聞いてないよ・・・お父様。

美咲の誕生日パーティーで、藤倉家の誠二との婚約を破棄し、そして聡一郎からの衝撃の告白。

今、聡一郎の紹介でみんなの前に立っているのは、美咲の知らない男性。

「喜多村　奏（そう）と申します。東野様から直々に挨拶をしに来て下さいました。そして僕は今年で１８歳になります。正式に美咲さんとご結婚をと考えております。そして、会社を継ごうと思っています」

奏はそういうと聡一郎の一歩後ろに下がると、美咲の顔を見て微笑んだ。

その微笑みはとても柔らかく、誠二とは全く違うものだった。

「東野家と喜多村家では、もう契約を結んでおります。このパーティーの後、改めて東野家と喜多村家の面会をと思っております」

「ちょっとお父様！私、そんなこと聞いてないわ！」

すると聡一郎は一瞬、美咲を睨んだかのように見えたが直ぐに微笑んだ。

・・・何今の。幻覚？

そしてみんなの前から身を引くと、藤倉家の方が聡一郎のところへ

駆け寄ってきた。

もちろん、誠二も・・・。

「どういうことですか、東野さん！婚約を解消なんて聞いてないです！」

藤倉正人がそういっている背後から見える誠二は、少し頭を抱えているように見えた。

「婚約解消のことは美咲が先に言ってしまったのです。それは私も知りませんでした。でも、婚約を解消しようとは思っていました。夏休み中、会社の方でトラブルがあり、そこで決定したことなのです」

ここで美咲と清子はどうして夏休み中、聡一郎が帰ってこなかったのかがわかった。

「すみませんが、もうこれ以上こちらに関わらないでもらえますか」

「あの、少しだけでいいので美咲さんとお話をさせていただけませんか」

そういったのは誠二だった。

聡一郎は「好きにしなさい」といって藤倉家から逃げるように喜多村家のところへ向かった。それを追うかのように清子も行ってしまった。

そして誠二は無言で二人きりになれる場所へと美咲を連れて行った。

「話って何？誠二と話すことなんてないわ」

「どうして、いきなり婚約解消なんてしたんだ。それを原因に学校で俺のこと避けてたのか」

美咲は誠二の顔を見れなかった。

誠二の話す声は怒鳴るわけでもなく、ただ静かに喋るその声が悲しそうに思えたから。

「誠二は、本当に私のこと愛してた？口だけだったんじゃないの？本当は・・・本当は他に婚約者がいたんじゃないの？」

美咲の声はだんだん震えていった。

どうして涙が出てくるの？私はまだ・・・誠二のことが好きだからかな？

「私、見たの・・・。誠二と知らない女の人が屋上でキスしてるところ！あの時・・・どうして抵抗しなかったの？どうして・・・キスなんか・・・」

美咲は我慢しきれず、目いっぱいの涙を零した。

誠二は美咲の涙を見ないようにと目を逸らす。

「あいつは・・・元婚約者だよ。美咲と婚約するって言ってからしつこく付きまとってきたんだよ。抵抗しなかったのは、あいつがそれで気が済むならって思ったからだ。」

本当にそうなの？本当はあの人のこと、好きで庇ってるんじゃないの？

美咲は誠二を疑うことしか出来なかった。今、婚約を解消してそれが不満だから言い訳にしているのではないかと・・・。

「そんなの・・・言い訳よ・・・、私のこと愛してなかった証拠よ！」

「俺は、美咲が金持ちだろうが貧乏だろうが、美咲の全てが欲しいと思ってた。体も心も全部。本気で初めて好きになった。本気で・・・美咲を愛してた」

“本気で・・・美咲を愛してた”この言葉は美咲に重く深く心に伝わってきた。

「今でも美咲を愛してる・・・。婚約解消するなら、また新しく初めての婚約者として美咲と一緒になりたいと思ってる」

美咲の目は真っ赤で、頬には大量の涙。少し冷たい風に揺られる長い髪の毛。

少しの沈黙。それを破ったのは誠二だった。

「美咲は、俺のこと、本気で愛してたか？」

その言葉に込めた誠二の気持ちは、深く悲しく寂しそうだった。

美咲は涙を流しながら、誠二の顔を見た。

「・・・本気でなんて愛せるわけないじゃん。全部嘘よ！好きも、愛してるも！私たちは最初から絶対、結ばれることなんてなかったのよ」

本当は・・・本気で愛してる・・・。今も、きっとこれからもずっと・・・愛し続ける。

美咲は誠二から逃げるかのように屋敷へと入っていった。

誠二は壁に拳を叩きつけた。

「なんでだよ・・・どうしてなんだよ・・・くそっ！」

美咲はその後、誠二と顔を合わすことはなかった。

結婚とニューヨーク

美咲の誕生日パーティーの後、東野家と喜多村家は改めて面会をした。

だが、そこに美咲の姿はなかった。

そして翌日、学校休日。

喜多村家へ行くことになっていた。美咲と奏の一対一。

「美咲様、待ちしておりました。こちらへ、どうぞ」

喜多村家の使用人に奏の待つ部屋へ案内された。

使用人が部屋の戸をコンコンと叩くと、中から「どうぞ」という声が聞こえた。

部屋の中には奏が一人、ソファで足を組んで座っていた。

奏は美咲が来たことを確認すると、立ち上がって美咲に微笑みかけた。

「いらっしゃい、美咲さん。どうぞ、そちらに」

美咲は恐る恐る奏の座る反対側のソファに腰をかけた。

「昨日はすみませんでした。せっかく来ていただいたのに面会でき

なくて・・・」

「いえ、気にしていません。今、こうして美咲さんとお話できることが何よりの幸せです」

上品で笑顔も素敵、完璧なルックス。文句なしのイケメン婚約者だ。

「それで、いきなりで悪いのですが、ご結婚の話です」

昨日の誠二とのことが忘れられない美咲は、奏が話している内容が耳に入ってこなかった。

美咲が最後に見た、あの誠二の悲しそうな顔。

「・・・さん？美咲さん？どうかしましたか？」

美咲の顔を覗き込む奏を見て、美咲はハッとなり苦笑いを作った。

「まだ調子が悪いんですか？」

「いえ、大丈夫です。続けてください」

そういう美咲の顔は、無理をしていた。

それを察した奏はソファから立ち上がると紅茶を美咲の前に差し出した。

「今日はこれを飲んで家でゆっくり休んでください」

「え？いや、私は大丈夫ですから」

「だめです！美咲さんの体調が悪くなってしまうほうが心配です」
奏の真剣な眼差しに、美咲はこれ以上断ることが出来なかった。
美咲は奏が用意してくれた紅茶を飲み終わると、奏が玄関まで案内してくれた。
「今日もご迷惑をかけてしまって申し訳ありません・・・」
「いえ、また今度ゆっくりとお話しましょう。美咲さんの調子がいい時にまたお越しください」
そういう奏の顔はとても穏やかで優しかった。
美咲は会釈をして、屋敷へと帰っていった。
屋敷に戻った美咲は、由梨華が来ていると知らされ、急いで由梨華のいる部屋へ向かった。
「由梨華、どうしたの？」
「美咲、誠二様があの女とよりを戻したって聞いた？」
美咲は一瞬驚いたが、直ぐにその驚きは消えた。
「もう、私には関係ないわ。あの人がどうなろうと・・・」
「違うのよ、誠二様・・・ニューヨークへ行って結婚するらしいわ。それが来年の４月から向こうで暮らすらしいのよ・・・」

・・・ニューヨーク。お父様と同じだわ。でも、私には関係ない。

美咲は自分に関係ないと言い聞かせた。

今の美咲には奏がいる。

「私は、もういいの。私は喜多村さんともう直き結婚するんだもの」

「美咲、本当にそれでいいのね？もう、チャンスはないかもしれないのよ？まあ、私は美咲がなんと言おうと美咲の見方だけど」

そういって由梨華は東野家を後にした。

その後、美咲は自分に関係ないと言い聞かせることしか出来なかった。

由梨華の言葉は美咲の脳を刺激していった。

誠二と奏

月日は流れ、１２月になっていた。

外は寒気に包まれている。

そんな中、美咲は屋上へと足を運んでいた。

もう少しでクリスマスが来る。

クリスマスを過ぎれば、美咲は結婚をすることになっていた。

そして結婚式と同じ日に誠二がニューヨークへ旅立つことになっていた。

それまで、あと１０日を切っていた。

「・・・さむ！美咲、風邪引いちゃうわよ」

由梨華が美咲を心配して屋上の戸で立っている。

「私・・・後悔してるかも・・・。あの時、婚約解消せずに駆け落ちでもなんでもしてたら、私は今・・・」

「もう過去は振り返らないの！今は喜多村さんのことだけを考えるのよ！」

奏は後継者として、いろいろ忙しくやっていた。

美咲と連絡も会うことも出来ていなかった。

でも、クリスマスは一緒に過ごそうと言われていたのだ。

「ねえ、美咲？もう誠二様のことは忘れたほうがいいわ。これからずっと誠二様のことを引き摺っていたら、いつまで経っても幸せにはなれないわよ？」

「分かってる・・・。忘れようとしてる。でもね、あまりにも楽しすぎたのよ・・・。一緒にいた時間が短かったぶん、今、ずっと一緒にいたいって思っちゃうの」

冷たい風が吹き、木々が揺れる。その音は切なく、寂しかった。

まるで、美咲の心を表しているかのようだった。

刻々と時間は過ぎていき、いつの間にか一日が終わろうとしていた。

「美咲、クリスマスまでに忘れなさい！もう彼とは会話も目を合わすことも許されないと思うことよ」

そういって由梨華は教室を出て行った。

この数日、美咲は抜け殻のように考え事をすることが多くなった。

そんなとき、美咲の携帯電話が鳴った。美咲は携帯電話を手に受話器マークを押した。

「・・・もしもし」

『美咲さん？どうかしましたか？美咲さんが元気にしているか心配でお電話をかけました。なかなか暇が作れなくて・・・。クリスマスまでには何とか方(かた)を付けときたいと思っています』

「私は元気ですよ。お仕事、頑張って下さい」

少しの沈黙。とても緊張感の生まれる、空白の時間。

『美咲さん』

「はい」

『僕は美咲さんを愛しています。だから美咲さんも僕のことを真剣に愛してくださいますか？』

その言葉は美咲の心にグサッと突き刺さった。

そう、まだ美咲は奏のことを本気では愛していなかった。

好きになろうと思えば思うほど、誠二のことが頭から離れなくなっていたのだ。

「・・・私は奏さんを愛しています。真剣に愛しているから、結婚をするんです」

嘘。本当は、今も誠二のことが頭から離れない。

『それを聞いて安心しました。でわ、僕はまだ仕事が残っているので。また連絡します』

奏との電話が切れた。

その途端、美咲は力が抜けベッドに横になり考えた。

今さら何を考えるのだと言いたいが、クリスマスまでに忘れようと頑張っていても、どうしても選択肢が浮かぶ。

結婚まじかの婚約者奏か、元婚約者で美咲から振った誠二か。

「もう、いや・・・。私の本当に愛してるのは・・・はあー、もうどうしてこんなに悩まされなくちゃいけないのよ」

美咲は悩みながら、いつの間にかベッドの上で眠りについていた。

大切で必要

クリスマス前日。

東野家と喜多村家で式場と人前に出す料理の試飲食、そして美咲のドレス試着。

そこには奏の姿はなく、美咲は結婚を悩みつつもドレスを試着していた。

ブライダル式の結婚はもちろんウエディングドレス。

こんな若さでウエディングドレスを着ようとは思っていなかった美咲。

「素敵ですわよ！美咲さん。美しいわ・・・」

「うん、奏も文句言わないだろう」

「・・・ありがとうございます」

奏の両親たちは心の底からなのか、美咲のことを褒め称えた。

美咲の両親も一人娘ということもありながら、言葉にならないくらい目をキラキラさせていた。

美咲のドレス試着も終わったところで、挙式の説明や試飲食などを次々に設定していった。

お金持ちの力を使えば、こんなことはすぐに終わった。

その夜、奏から電話が掛かってきた。

「・・・もしもし」

『今日はそちらに行けず、すみませんでした。式場はどうでしたか？』

「とても素敵なところでしたよ。ドレスも似合っているとおっしゃってくれました」

『そうですか、それはよかったです』

美咲はこのままだと後悔するのではないかと考え続けていた。

結婚してしまえば、もう離婚なんて出来ないであろう。だからその前に、と。

『美咲さん、明日のことなんですが。夜、綺麗な夜景が見えるレストランでお食事をと思っているのですが、どうでしょうか？』

「ありがとうございます」

きっと私は、この人を愛すことはできない。私は高級なウエディングドレスだって着なくてもいい、綺麗な夜景のレストランもいらない、ただ、前みたいに動物園へ行ったりしたい。私は社会を気にするより、庶民派なんだわ・・・。

『でわ、明日の夜、お迎えに上がります。また明日』

奏との電話が切れる。

美咲は顔を手で覆うと無意識に「誠二・・・」と呟いていた。

学校は冬休みになっているため、誠二とは顔を合わせていない。存在さえも感じられていない。

するといきなり携帯電話が鳴った。美咲は少し驚き、携帯を見た。

「・・・由梨華か・・・・もしもし」

『あ、美咲？明日どうするの？誠二様に会わなくていいの？』

「会わなくていいのって会ったらいけないっていったのは由梨華でしょ！もう今さら会ってどうしろっていうのよ」

美咲の誕生日パーティー以来、誠二とは一言も話していないし、一目も見ていない。

『明日の夜、学校で誠二様のお別れパーティーをするの。来るわよね？』

明日の夜・・・・―。

「もう奏さんに食事に誘われてるの・・・」

『もう！どっちの方が大切だと思ってるのよ！5時から11時までに絶対来なさいよ！』

返事もする間もなく電話は切れた。一方的に切られてしまったのだ。

どっちの方が大切って言われてもどっちも大切だわ・・・。会社的には奏さん、だけど私が本当に愛しているのは誠二・・・。

美咲は大きな溜息をつき、頭を抱えた。

私が本当に大切で必要としてるのは・・・。ってどっちもよ！今は、どっちも・・・。でも今まで散々お父様には甘えてきて、今回もまた婚約を破棄するなんて・・・、そんなの出来ないわよ・・・。

選択

翌日、クリスマスイブ。

美咲はベッドの中で丸くなり、頭を抱えていた。

今晩、奏との食事と誠二のお別れパーティーが被っていたからだ。

「どうしよう・・・」

シェフが作った朝食も食べる気になれなかった。

今回が、本当に最後のチャンスになっちゃうのかな？

選択肢は二つしかない。

奏との食事へ行くのか、誠二にちゃんと気持ちを伝えて別れるのか。

それとも・・・どちらとも、選ばない？

愛のない結婚なんてしても意味がない。したことろで何が変わるわけでもない。

愛され、愛すことことが本当の幸せ。

「私・・・、幸せなのかな？」

ブツブツ独り言を言っている間にお昼になっていた。

またもシェフが作ってくれた昼食が部屋に運ばれてきた。
だが、美咲はそれに目を向けることはなかった。

コンコンと部屋を叩く音がした。

「どうぞ」

入ってきたのは清子だった。

「美咲、そろそろ奏さんとお食事に行く時間でしょ？用意しなさい」

美咲は時計に目をやると、４時３０分だった。迎えに来るのは５時だった。

上品な真っ白のワンピース。胸元の薄ピンク色の結ばれたリボン。靴はファー付きハイヒール。どれも高級ブランドで見にまとう。

「美咲・・・、私もね、本当は聡一郎さんとの結婚を反対されていて、好きでもない人と結婚させられそうになったわ・・・。美咲、貴方が本当に愛している人を選ぶのよ」

突然言った清子の言葉に美咲は目を見開いた。

すると奏が迎えに来たという情報が入ってきた。

美咲は清子の言葉を気にかけながら、奏が待つ車に乗り込んだ。

「出して」

奏が何かペラペラ話しているのにも関わらず、美咲は清子の言葉が引っ掛かっていた。

高級レストランに入っても、美咲は愛想笑いをして奏に不快な思いをさせないようにした。

時刻は１１時を廻ろうとしていた。

「やっぱり・・・私・・・」

「どうしましたか？美咲さん？」

奏が美咲の顔を覗き込んだ瞬間、美咲はいきなり立ち上がった。

「すみません、奏さん」

そういって美咲は走り出していた。無意識に美咲は走り続けていた。車も使わずに・・・。

レストランを出て行くと、美咲が向かっていたのは学校。

美咲が学校へ到着したときには、どの部屋にも明かりは点いていなかった。

「・・・間に合わなかった」

息を荒げながら、美咲はその場に崩れ落ちた。

美咲の目にはたっぷりの涙が溜まっていた。

「・・・美咲」

その声に美咲は驚き、後ろを振り向いた。

ホワイトクリスマス

美咲の後ろに立っていたのは誠二だった。

「こんなところで何してんだよ」

心配そうに見つめる誠二の瞳が、美咲を安心へと導いた。

美咲の頬に涙が伝った。

「どうした？」

「・・・誠二のこと・・・まだ好きなんだもん。離れたくなかったけど・・・」

駄々をこねる子供のように美咲は泣き叫んだ。

そんな美咲を誠二は抱きしめる。

「優しくされると・・・離れたくなくなる・・・」

「もし美咲があの時、婚約解消しなかったら、俺は誰になんと言われようが美咲を連れて遠くに逃げようと思った。でも愛してるわけないって言われて、正直ショックだった」

“本気でなんて愛せるわけないじゃん”

美咲の脳裏にあの日のことがフラッシュバックした。

愛しているのに嘘をついて、辛い思いをして・・・。

「・・・もう遅いんだ・・・。俺、ニューヨーク行くって決めた。でも結婚はする気ない」

「結局行っちゃうんだ・・・」

美咲の涙は止まることなく流れ続けた。

結婚式と同じ日に誠二はニューヨークへ行ってしまう。

きっと当分帰って来ないだろう。もしかすると二度と帰って来ないかもしれない。

「美咲、幸せになれよ・・・」

そういうと誠二は美咲を抱きしめていた腕を緩め、美咲から一歩離れた。

美咲は愛おしそうに誠二を見る。

「そんな顔するな・・・、もう美咲は俺の婚約者じゃない」

その言葉に美咲はハッとなった。

奏の存在を半分忘れていたからだ。レストランから駆け出してきたこと・・・。

「誠二、一つ聞いていい？」

「ああ」

「私のこと、世界中の誰にも負けないほど、愛してた？」

美咲は誠二の目をまっすぐ見て質問した。

「愛してた。誰にも負けないほど、美咲のこと愛しまくってた」

その言葉に美咲は満面の笑みを浮かべた。

すると真っ白な雪が降ってきた。

「初雪だ・・・、きれー」

ゆっくりフワフワと空から降ってくる雪は、恋のように甘くてどこか悲しい、そんな感じ。

息をするたび、口から白い吐息が出る。

１２月２５日、２４時。これが誠二との最後の別れかもしれない。

「誠二・・・、ありがと・・・。じゃあ、さようなら」

そういって美咲は誠二に背中を向けて歩き始めた。

涙をいっぱい発散して・・・。

誠二は追いかけてくることもなく、ただ美咲の行く後姿を見つめるだけだった。

こんなにも・・・

後悔という言葉。

あの時、どうして素直に愛してるって言えなかったのだろうか。

「誠二・・・」

ホワイトクリスマスの夜、美咲は街真ん中で泣き崩れていた。

周りにどう見られようが、今は財閥だからとか、そんなの関係無しに・・・。

「・・・美咲さん」

美咲の目の前に立っていたのは奏だった。

「奏さん・・・、すみません、こんな恥ずかしいことしてしまって・・・」

「いいんですよ。僕はそんなこと気にしません。美咲さんがいてくれれば、それでいいんです」

奏の言葉に美咲はもっと涙が溢れ流れた。

すると奏が自分の胸に美咲を引きつけた。

「帰りましょう・・・」

美咲は黙って頷いた。

奏が車を用意してくれた。行先は奏の家だった。

「もう家には電話してます。今日は家(うち)に泊まって行ってください」

「・・・やさしいんですね」

「貴方のことを愛してるからですよ」

美咲はハッとなった。

“愛”なんて軽いものだと思って生きてきた。なのに誠二とであってこんなにも変わったんだと・・・。

“愛”というものを知ったんだ・・・と。

「私・・・奏さんとは・・・」

「わかってます。美咲さんには他に愛している人がいるんでしょう・・・。でも、婚約は解消させません。美咲さんが、僕を愛してくれるように僕が貴方に尽くします」

その言葉に美咲は顔をシュンとさせて俯いた。

喜多村家についたころ、美咲はぐっすり眠っていた。

「こんな無防備な顔して・・・、絶対離したくない・・・」

奏は眠っている美咲の唇に一瞬触れる程度のキスをした。
奏は顔を離すと美咲を抱きかかえて（お姫様だっこで）家まで運んだ。

一方。

「ちょっと・・・、あんたなんで追いかけなかったのよ！」
美咲が去った後、隠れて見ていた由梨華が誠二に駆け寄ってきた。
「俺に追いかける資格なんてねえよ」
「美咲の気持ち分かってるんでしょ！？どうしてそんな酷いことできるのかしら・・・」
由梨華は誠二に呆れてため息をついた。
誠二は俯いたまま、立ち尽くしていた。
「あんたがニューヨーク行く日・・・、あの子は喜多村奏って人と結婚するのよ？それでも平気なの？」
「んなわけねえだろ！結婚しちまったら、あいつとはもう会えなくなる・・・一か八かだ・・・」
由梨華は目を丸くし、その言葉の続きを予想した。
「まさか・・・結婚式に乗り込む気！？無理よ、ガードマンがいっ

ぱいいるのよ？」

「無理とかやってみねえとわかんねえだろ・・・」

由梨華はまたも大きな深い溜息をついた。

誠二は黙って由梨華に背を向けて歩き出した。

結婚しよう、忘れよう

美咲が目を覚ましたのは翌日の朝だった。

「ん・・・」

「あ、起こしちゃいましたか？」

美咲は奏の部屋にいることに気付いた。

奏はスーツに着替えていた。

「昨日はすみませんでした・・・」

「いえ、もうそのことは気にしないで下さい。」

美咲はそういってくれる奏に申し訳なく思った。

「ホント、すみません・・・」

「なんだか、美咲さんには謝ってもらってばかりですね」

そういって奏は微笑んだ。

その笑顔が美咲の心を複雑にした。

誠二を好きなままの美咲の心はこのまま奏と結婚していいのかわからなかった。

「私・・・奏さんのこと好きになれるように努力します・・・」

奏は不安そうな顔をしている美咲に微笑んだ。

「何年でも待ちます」

奏は美咲より2年年上。まだ美咲は子供。

「じゃあ、僕は仕事の手伝いをしてくるので、美咲さんは帰りたいときに帰ってください」

「・・・はい」

奏は部屋から出て行った。

美咲は奏の部屋を見渡した。紳士的でシンプルな部屋。必要なものしかおいていない部屋。

美咲は帰ってシャワーを浴びることにした。

喜多村家から出た美咲は、東野家の車を呼び家に帰った。

シャワーを浴びている美咲は、全てを洗い流すかのように頭の上から洗い流した。

シャワーを浴び終わり、使用人が用意してくれていた服を着た。

「お嬢様、食事の準備ができました」

「そこ、おいといて」

美咲はソファに座り、真剣な顔をして考えた。

もちろん奏との結婚。それと誠二を忘れる努力をすること。

私は奏さんと結婚する。誰になんと言われようが結婚する。

美咲はそういい聞かせると使用人が置いてくれていた朝食を口へ運んだ。

結婚しよう、そして忘れようと思うために・・・。

そしてそんな日が毎日続いていた。

迷走

年が変わり、正月の時期になった。

経済のこともあり、聡一郎はニューヨークへ行くまで仕事に尽くしていた。

結婚まで、後1日。1月5日、美咲は奏と結婚することになっている。

美咲は部屋に閉じこもっていた。

外は騒がしい。お金持ちの暮らしなんて庶民とは違って大晦日で遅くまで起きているわけではない。

それより他に忙しい用事があるからだ。

「結婚・・・か」

美咲は奏から貰った指輪が入っている箱を見つめた。

それを手にすると、パカッという音と供にダイヤのついた指輪が姿を現した。

１６歳で結婚。庶民の人たちからすれば、絶対ありえないこと。

すると携帯電話が鳴り響いた。

「・・・奏さん」

美咲は何コールも鳴る携帯を手に取り、受話器マークを押した。

「もしもし、どうかしましたか？」

『あ、いえ。美咲さんが元気にしてるか確認しただけです』

「私、そんな子供じゃないですよ」

そういうと奏はクスッと笑い、『そうですね』と言った。

『それだけなので。じゃあ・・・』

電話が切れてしまった。

美咲は携帯をギュッと握り締めた。

明日は結婚。そして誠二がニューヨークへ行ってしまう日。

美咲のあの誕生日パーティーがなければ、今美咲はきっと誠二と仲良くデートしていたであろう。

結婚なんて考えなかったであろう。

美咲は窓から見える景色をボーっと眺めていた。

するとまた電話が掛かってきた。相手は由梨華。

「もしもし？」

『今から会えるかしら』

美咲は首を傾げながらも、由梨華がいると思われるカフェへ向かった。

「由梨華？どうしたの？」

「美咲、明日が最後の最後の最後のチャンスだからね！」

いきなり言われたその言葉に美咲は首を傾げた。

「明日、あのまま結婚するのか、しないのかよ」

「でも・・・、ここまで来ちゃったし・・・」

諦めがちの美咲に由梨華は呆れ溜息をついた。

「あっちはどう思ってるかわかんないわよ？」

ボソッと言った由梨華の声は美咲には届かなかった。

「とにかく！迷っちゃダメよ！」

そう言い放った由梨華は美咲を置いて歩いて行ってしまった。

「どういう意味だろう・・・」

美咲は結婚式前日に頭を抱えることになった。

由梨華の言葉が頭に引っ掛かっていたからだ。

ご飯を食べているときも、風呂に入っているときも、ベッドの中でも考えていた。

結婚式真っ最中

「美咲さん、綺麗ですわね・・・」

「・・・ありがとうございます」

とうとうやってきた美咲と奏の結婚式。そして誠二のニューヨーク行き。

純白のドレスを身にまとった美咲は、その姿を鏡で見つめていた。

「美咲？どうかしたの？」

清子から話しかけられハッとなる美咲。その様子は明らかに可笑しかった。

それを、清子は見逃さなかった。

「美咲！今回の結婚で変わるのよ。美咲、しっかりしなさい」

「・・・はい」

美咲の頭の中は昨日由梨華に言われた言葉と誠二のことでいっぱいだった。

するとコンコンと戸を叩き、ゆっくり戸が開いた。

「準備をお願いします」

「・・・はい」

美咲はゆっくり立ち上がり、挙式の近くまで向かった。

・・・これでいいのよね？私、これで幸せなのよね？

美咲は式場の扉の前で立ち止まった。隣には聡一郎。

扉が開き、少しずつ一歩一歩踏みしめて奏のところへ近づいていく。

奏が待ち構えている、あの腕に・・・。

奏の腕に腕を組んだ美咲は“これでいいんだ”と確信した。

「新郎、喜多村奏。あなたはその健やかなるときも、喜びのときも、悲しみのときも、これを愛し、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

「はい、誓います」

「新婦、東野美咲。あなたはその健やかなるときも、喜びのときも、悲しみのときも、これを愛し、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

誓って、間違いないよね？隣に立っている彼を信じればいいんだよね？

「・・・美咲さん？」

奏が美咲の顔を覗き込む。

「美咲！」

その声に驚いた会場のみんなは扉が開く音に気付いた。

そう、誰もが思ったであろう。このドラマ的展開を・・・。

「・・・誠二」

「美咲、俺と一緒に・・・ニューヨークに行こう」

奏は美咲の驚いている顔を見て、「美咲さん？」と呼びかけた。

「ちょっと、君！無礼もいいところだ！この人を突き出してください！」

聡一郎がそう叫ぶと周りのガードマンが誠二を鷲掴んだ。

「美咲！待ってるから」

そうして扉は閉められた。

美咲の目には涙が溜められていた。

「美咲さん・・・、彼のことまだ・・・」

「・・・誠二・・・」

このまま続けてもダメだと思った奏は一息ついた。

「すみません、皆様。今日は取りやめに致しましょう。結婚式ならいつでも挙げられます」

「いや、でも・・・」と聡一郎。

「お父様、すみません。このままでは美咲さんが可愛そうです・・・」

会場は騒がしいまま、結婚式は中断された。

「なんてことしてくれたんだ！」

美咲の座っている反対の席には聡一郎と清子、そして喜多村家の人が座っていた。

「美咲、あの人とはもう関係を絶ったんだろ？」

「・・・はい」

「だったらどうしてあんなところまで彼が来るんだ！」

誠二が来たのは美咲のことがまだ好きだからだ。

美咲も心のどこかで誠二のことがまだ好きだ。

「私・・・やっぱり・・・」

「あの人とはもう会わないことね・・・。美咲、もうあの人のことは忘れなさい」

美咲は俯いたまま賛成も反対もしなかった。

聡一郎は怒りを溜め、喜多村家の皆は険しい顔をするだけだった。

「本当に申し訳御座いませんでした」

「み、美咲さんは悪くないわ・・・。藤倉さんの息子が悪かったのよ」

「そうですよ、美咲さんは悪くないです。また結婚式を挙げれば済むことです」

そういって奏が優しく微笑みかける。

その微笑みに答えてあげることが出来ない美咲は目にいっぱいの涙を浮かべた。

「やっぱり私・・・誠二のことが・・・」

「だめよ！美咲・・・だめ・・・」

「だったら私！・・・私、東野家の名を捨てます！ここから、出て行きます」

美咲は立ち上がり聡一郎の目をまっすぐ見つめた。

聡一郎と清子は目を丸くしたまま固まってしまった。

「み、美咲・・・本気か・・・バカなことを言うんじゃない！」

「バカでもいい！私の幸せは私が掴むのよ！」

そういって美咲は部屋を飛び出した。

自分の部屋に入った美咲は荷造りを始めていた。

「地位も名誉も・・・そんなのいらない・・・」

キャリーいっぱいに入れられた荷物を持って、美咲は屋敷を飛び出した。

きっと今頃・・・お母様は泣いているんだろうな・・・。お父様は頭を下げて・・・

美咲は屋敷に背を向けて、キャリーを引きずり走り出した。

誠二が待っているのはきっと空港。

美咲はタクシーを呼びとめ、空港まで向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0740z/

ドＳ婚約者

2011年12月29日07時48分発行